

ツーリズム教育の構想

— 中学校を中心として —

小山 竜

1. 論文構成

序章 問題の所在と研究の目的

第1節 問題の所在

第2節 研究の目的と方法

第3節 論文の概要

第1章 ツーリズム発展の背景と現状

第1節 ツーリズムの思想と理論

第2節 日本におけるツーリズムの政策と現状

第2章 ツーリズム教育を行うことの意義

第1節 ツーリズム教育の定義

第2節 ツーリズム教育を行うことの社会的な意義

第3節 学校教育にツーリズム教育を用いる意義

第3章 学校教育におけるツーリズム教育のモデル提起

第1節 日本社会におけるツーリズム教育の課題

第2節 ツーリズム教育のモデル化

終章 本研究のまとめと今後の課題

第1節 本研究のまとめ

第2節 今後の課題

参考文献、参考論文、参考 URL 等

2. 問題の所在と研究の目的

(1) 問題の所在

近年日本においては情報化がますます進行し、至る所にネットワーク環境が設備されている。以前と比べてパソコン、携帯電話(スマートフォンを含む)、タブレット型端末などネットワークへの接続デバイスが多様化していることや、光回線、DSL回線、無線LANなどのインフラ整備がなされていることから、今後

日本は「ユビキタス社会」へと前進し続けるだろう。この情報化の波は学校現場においても大きな影響を与えているが、筆者は特に3つの点について懸念している。

1 点目はスマートフォンなどを用いたネット上での「いじめ」である。日本でいじめが社会問題となって長い間、情報化が進むことでその形も変化してきている。そのため、学校教育において情報モラル教育はもちろん、道徳観や正義感を兼ね備えた思いやりのある児童・生徒を育成していかなければならない。特に中学生においては小学校や高等学校と比べるといじめ発見件数が多いことから、一刻も早い対策が必要である。

2 点目は文部科学省も指摘しているが、児童・生徒の「物事を探索し、吟味する機会の減少¹⁾」である。現在身の回りには沢山の情報が溢れているため、私たちはその情報を正しく運用する力が求められる。特に最近ではアルバイトの従業員がネット上に不適切な写真を投稿されたことが社会問題となった。このような事件を防ぐためにも、情報に関してだけでなく義務教育段階において、物事を吟味する機会を増やしていく必要があると筆者は考えている。

3 点目は「人間関係の希薄化」である。近年スマートフォンが普及することでTwitterやFacebookなどのSNS利用者が増え、ネットを通じたやり取りが図られることが多くなってきた。これらは便利な面もあるが、様々な事件が起こっていることも事実で、例えば2013年には東京都三鷹市で女子高生がSNSで知り合った男性に殺害されるといった事件も起こっている。このような道具を用いないコミュニケーションが減少してきたのは学校現場だけでなく、地域や家庭に関しても同様である。児童・生徒には情報化の時代において良好な対人関係を形成する能力を養う必要がある。

以上3点の学校現場を取り巻く課題に対して、学校教育では今後どのような教育が求められるだろうか。

(2) 研究の目的と方法

3つの課題に対する教育として効果的だと考えられるのは、自然における交流的・体験的な活動だと筆者は考えている。国立青少年教育振興機構の調査によると「自然体験が多い児童・生徒に道徳観・正義感がある²⁾」という結果が出ている。物事を探索・吟味する機会に関しては、学校側がそういった場を積極的に作り出していく必要があるのは間違いない。そのため、児童・生徒に探索・吟味させることを目的に、今まで知らなかったような新しいことを始めることが必要である。人間関係の希薄化については、インターネットを介さない人間同士の交流の場を積極的に生み出していく必要がある。これは児童・生徒同士に限らず、地域や家庭での人間関係にも同じことが言えるため、それらを含めた交流の場を創出することが望ましい。

ここで筆者が提示したいのが本研究の題目にもある「ツーリズム教育」というものである。「ツーリズム」は日本の農山漁村などにおける「新しい観光」とイメージする人が多いかもしれない。実際、これまでも町おこしや地域活性化など観光面・経済面で語られることが多かったが、そもそも根本は対象となる地域の生活や文化についての学びが中心であることから、このツーリズムを学校教育に活かせるのではないかと考えた。これをツーリズム教育と名付け、3点で示した課題をツーリズムという新しい方法でアプローチしていけば、学校教育に新たな可能性が生まれる。以上のことから本研究では、児童・生徒にとって豊かな学びとなるツーリズム教育の構想を行っていく。

研究の方法としては、まずツーリズムとは何なのかについて、農林水産省東北農政局の22件の事例を取り上げ、内容を分析することでツーリズムの枠組みを示す。その上で「ツーリズム教育」の定義付けを行い、どんな社会的意義・教育的意義があるかについて、22件の事例によって明らかになったものを中心に論じる。

しかし、もともと観光として普及してきたツーリズムをいきなり学校教育に導入するには課題も多い。そのため、ツーリズム教育を実践する上での学校教育の課題を示し、これを解決・改善する手段を踏まえたツーリズムのモデル化を提示する。ここまでを行うことを「ツーリズム教育の構想」とする。

3. 論文の概要

本研究は、1990年頃から日本に普及してきたツーリズムという観光形態の一部を学校教育へ導入するというものである。今日、日本社会においては地域や家庭の教育力の低下が問題視されているが、このツーリズムはそういった問題の解決の糸口となり、その他にも児童・生徒に様々教育的効果をもたらすものである。もし、これを学校教育に導入することが可能であれば、学校という教育現場が児童・生徒はもちろん地域や家庭の教育力の現状を変えることが可能となるだろう。

(1) 第一章

第1章「ツーリズム発展の背景と現状」では、まず第1節ではツーリズムの思想の考察を行うために語源についての研究を行った。もちろんツーリズムは *tourism* という外国語であり、どういう経緯でこの言葉が生まれたのかを調査した。tour に関しては14世紀、そこから *tourism* が派生したのは1811年ということだった。旅行や観光の違いなどを筆者なりに分類することで *tour*、*tourism* がどう位置づけられるのかを述べた。本研究では観光(移動先で目的を果たす)の領域が拡大してきた結果、新たに誕生したものがツーリズムであるという結論に至った。そして、そのようなツーリズムがどういう経緯で日本社会に普及したのかについて、観光庁が観光立国を推進するための柱の1つとしてグリーン・ツーリズムやエコ・ツーリズムの普及の背景調査、ツーリズムに関するNPO法人の

調査、観光学が学べる大学やツーリズムが学科として設けられている大学の調査などを行った。これらを調査し表に整理したものからも、ツーリズムがいかに現代の日本社会に広まっていることが分かる。しかし、研究を進めるごとに多様なかたちのツーリズムを確認することとなり、そもそもツーリズムとは何かを明確にする必要があった。そのため、ツーリズムの枠組みを示すために農林水産省の東北農政局で示される 22 件の事例をもとに調査・分析を行った。東北 6 県のそれぞれの体験地域で行われているツーリズムのプランを分析し、それらを表に整理した。それらを総合することでツーリズムの枠組みとしては「①農業体験」、「②工芸体験」、「③食・料理体験」、「④レジャー・スポーツ」、「⑤文化・芸能・音楽」、「⑥見学・調査」、「⑦その他」という 7 つのジャンルに分けることができた。また、民泊の有無や利用団体などについても調査を行い、東北の各県のツーリズム実践の特徴を分析・考察することができた。

(2) 第二章

第 1 節では本研究のテーマでもあるツーリズム教育を「児童・生徒が普段の生活圏を離れ、仲間や地域の人々と共に農山漁村における生活交流体験を行う教育」と定義した。その上でツーリズム教育を行うことが社会的・教育的にどのような意義があるのかを述べた。ここで強調しておきたいのは、ツーリズム教育はこれまでの体験学習とは異なるということであり、ツーリズム教育の本質は農山漁村における交流という点にある。東北における調査事例においても、ツーリズムによって第二の故郷として愛着を持つ児童・生徒や、別れの際に涙を流してお礼を伝える様子が確認できることから、この交流によって地域の人々との繋がりの強さが得られるのがツーリズム教育の魅力でもある。第 2 節の社会的な意義については、「地域経済の活性化」と「地域や家庭の教育力向上」を述べた。前者ではツーリズムを行うことでどのくらいの経済効果があるのか、雇用拡大にどのくらい貢献するのかについて具体的な資料をもとに述べた。そして結果的に観光庁が目指す観光立国を推進できることになる。後者では文部科学省の調査をもとに、地域・家庭の教育力の低下の原因を把握した上で、その解決策をツーリズム教育によって示した。原因としては「①個人主義が浸透してきている」、「②地域が安全でなくなり、子どもを他人と交流させることに対する抵抗が増している」、「③近所の人々が親交を深められる機会が不足している」、「④人々の居住区に対する親近感が不足している」などが挙げられるが、ツーリズム教育であればこれらの状況を改善できる理由を述べた。第 3 節では学校教育にツーリズム教育を用いる意義について述べた。ここでは児童・生徒への効果、学校への効果に分けて考察したが、前者ではツーリズムと体験した児童・生徒の感想をもとに学習意欲の向上や、実際に農山村を肌で感じることで養われる効果などを示した。後者ではツーリズム教育を行うことが、開かれた学校を実現できることや保護者の期待など実際の感想をもとに裏付けた。

化」と「地域や家庭の教育力向上」を述べた。前者ではツーリズムを行うことでどのくらいの経済効果があるのか、雇用拡大にどのくらい貢献するのかについて具体的な資料をもとに述べた。そして結果的に観光庁が目指す観光立国を推進できることになる。後者では文部科学省の調査をもとに、地域・家庭の教育力の低下の原因を把握した上で、その解決策をツーリズム教育によって示した。原因としては「①個人主義が浸透してきている」、「②地域が安全でなくなり、子どもを他人と交流させることに対する抵抗が増している」、「③近所の人々が親交を深められる機会が不足している」、「④人々の居住区に対する親近感が不足している」などが挙げられるが、ツーリズム教育であればこれらの状況を改善できる理由を述べた。第 3 節では学校教育にツーリズム教育を用いる意義について述べた。ここでは児童・生徒への効果、学校への効果に分けて考察したが、前者ではツーリズムと体験した児童・生徒の感想をもとに学習意欲の向上や、実際に農山村を肌で感じることで養われる効果などを示した。後者ではツーリズム教育を行うことが、開かれた学校を実現できることや保護者の期待など実際の感想をもとに裏付けた。

(3) 第三章

第 3 章「学校教育におけるツーリズム教育のモデル提起」では、そもそもツーリズム教育を行うには日本社会を取り巻くいくつかの課題があるため、まず第 1 節ではそれらの課題について述べた。ここでは学校現場の問題と地域との連携に関する問題の 2 つに分け、前者では①時数の問題、②費用の問題、③安全性の問題、④モニター・ペアレントの問題を、後者は⑤連携・協力体制の問題、⑥受け入れ先の確保の問題を示した。ツーリズム教育が学校教育で実践されるようになるためには、これらの課題を解決はできなくても改

善していくようなモデルを示す必要があった。そのため第2節ではそういった課題を踏まえ、ツーリズム教育のモデル化を行った。ツーリズム教育を行う上で①時数の問題は、ただでさえ忙しい学校現場にとって実施が難しい要因の一つだと言える。実施を可能とするためには教科のカリキュラムに組み込む方法、総合的な学習の時間として取り入れる方法、特別活動の学校行事として、主に修学旅行などの際にツーリズム体験を行う方法が考えられる。②③④の課題に関しては家庭との連携の重要性を述べた。特に③安全性の問題に関しては実施する上では最も考慮しなければならない、⑤連携・協力体制の問題も交えて論じた。具体的には消防署、救急病院、警察など万が一に備えた連携の他、保険への加入などの必要性についても述べた。最後に⑥受け入れ先の確保の問題に関しては、ホンモノを提供するという地域の質を変えずにツーリズム体験が行える場所を創出していかなければならない。そのため、エコ・ミュージアムなど具体的な地域を挙げ、今後のツーリズム実施の可能性について述べた。これらは問題に対する解決策にはならないことを自負しているが、今日の日本におけるツーリズム教育の実施に向けた改善策となっている。

4. 今後の課題

本研究を行ってきた上での今後の課題として3点を示しておきたい。1点目は文献についてである。ツーリズム自体の研究を行ったが、その方法は主にウェブサイト上の情報を基とした研究となった。ツーリズムの理論については様々な書籍が出版されているが、具体的な実践に関する文献は少ないのが現状である。特に観光的な側面から示される理論は多く存在するのだが、今回ツーリズム教育として新たに教育の側面から理論づけて説明するには苦労した。調査方法が主にウェブサイトを中心としたものになったために、中に

は誤った情報が混じっている可能性もある。体験型の教育旅行ではツーリズムと言えるような体験もあり、多くの小中学校が実践していることから、それらの実践集などを作成できればよりツーリズム教育が理論的なものにできたかもしれない。

2点目は、筆者自身のツーリズム体験についてである。研究を進めると同時に自らツーリズムを体験しながら論文を書き進めたかったというのが本音である。実施のためには体験地域の人々の援助を借りることとなるが、児童・生徒に体験させたいという願いを持って教育するのは教員でなくてはならない。そのため、教員自身がツーリズムを体験し、その必要性・有意義性を体感することが不可欠である。そのため、今後は自分自身がツーリズムを体験することでツーリズム教育についての研究を進めていきたい。

3点目は、ツーリズム教育を学校教育で実践する余裕があるのかという問題がある。ただでさえ忙しい学校現場に加え、授業時数も明確に決まっているため、ツーリズム教育を実践するにはカリキュラムにどう位置づけるかが問題となる。本研究ではカリキュラム開発までを行うことはできなかった。ツーリズム教育の構想は行っても、実施に関しては丸投げの状態となってしまったのが反省点である。そのため今後の課題として、ツーリズム教育の教科における具体的なカリキュラム開発をしていきたい。

¹ 文部科学省「体験活動の教育的意義」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/04121502/055/003.htm
² 国立青少年教育振興機構「子どもたちに体験活動を！」
<http://www.niye.go.jp/files/items/41/File/kodomotachinitaikenkatudouwo.pdf>